『人と森の環境学』

井上　真、酒井秀夫、下村彰男、白石則彦、鈴木雅一共著（東京大学出版会）

本書は、東京大学教養学部における総合科目の講義をもとに編集された本である。学生の講義に対する理解を深めるための教科書をつくることと、学生の森林に対する理解があまりにも不十分であり、これが現在での森林に対する人々の一般的な認識と考えられることから来る危機感が、本書執筆への大きな動機になったそうである。

10年前ならこういった本が世の中にうけいれられるかどうか疑問であったろうが、いまなら森林に対する見方が大きく変化しており、興味をもって読んで頂ける、と考えたそうである。そのとおりだと筆者も思う。

本書の本論は、森林にたいする考え方を、生活者、生産者、消費者、地域住民の立場に立ってまさに教科書らしく丹念に学問的妥当性と現代人としての常識性をうまく練りこんで表現している。

あくまでも環境論を中心に据えながら、背後で、森林環境を守るという営み、つまり林業にも目配りしながら書かれている。さらに、付け足しと断り、気を使いながら（照れながら！）、最終章で「森についての６つの問い」として林業問題を取り上げている。

実は、筆者に興味があったのはこの問題であった。「環境論」の本がいかに「産業としての林業」に触れるのか、または少なくとも、目配りするのか。「一般の読者（学生）」に向けてどの程度林業の現状への見解を述べうるのか。「本音を述べるのか」という点であった。

結論から言えば、「おずおず」とではあり、「遠慮しいしい」ではあるが、「本気で本音」を述べていた。前述した最終章を中心にである。そういう意味で、研究者の良心にあふれた好著であると思う。繰り返すが、特に最終章がいい。

最終章でどんなことを書いているのか。まず1951（昭和26）年の森林法改正は、戦中戦後の過伐で山林が荒廃し、水害や山地崩壊が多発していたなか、復興のため木材需要が増大していたので、「森林伐採」や「林地開発」に対して規制的な性格のつよいものであったことが書かれている。1962（昭和37）年の森林計画制度改正では、考え方が木材生産重視へと移行していったこと。そこには、人工林の拡大生産と環境の両立思想があったこと。2001（平成13）年に改正された森林・林業基本法では、林業振興と森林の多面的機能の発揮が二本柱として掲げられているけれども、重心は後者の方に移っていること等々である。

現在の林業経営の危機については、一番の原因である木材輸入についてまず触れている。輸入可とするのは、木材の生産コストを勘案した循環的な方法で産出された木材のみに限るべきだと言う。また、わが国の1,000万haの人工林造成はそれなりの合理的判断の歴史的産物であり、結果論で針葉樹人工林の過多と批判ばかりするのではなく受け入れるべきであると述べる。そして、コスト的に外国に比べて比較劣位にある日本の森林・林業は、経営的に成立し得ない地域・山林においては公的管理もやむなしと提言する。林業に展望がすぐにあるわけではないが、市民社会が成熟したのだから日本の広大な（！）森林を維持するべきだし、できるのではないかと述べている。環境問題の解決にも健全な林業が必要であると述べている。筆者は心から同意し安心したのである。繰り返すが好著である。

（2004年10月　税込み2,100円　178頁）

（秋山孝臣）